

# 「幽霊」の古層

——江戸の庶民文化にはじまるもの

堤 邦彦

## 一 はじめに——幽霊研究をめぐる二つの潮流

### 真実としての怪談

日本の怪談に描かれた「幽霊」を、語り手の側に重点を置いて分類した場合、おもに二つの話群がおもい浮かぶだろう。ひとつは真実として語られたフォークロアのなかの幽霊話であり、地方の奇談や世間話のかたちで伝承され、記録されてきた。これに対して、今ひとつの流れは、ある目的のもとに人為的に創り出された文芸、芝居、絵画等の幽霊像である。さらには後述のように、唱導僧の教化譚に登場する「浮かばれない死者」もまた、葬送供養の大切さを説く説教の文脈にそって創造された僧坊主導の幽霊像と考えてよい。

幽霊の存在を、本当にあったこととして語る前者の話群と、作りものと知りつつ本当らしく見せる創作怪談の違いに初めて言及し、前者に学問的な価値を認めたのは柳田國男であった。「自身がこれを真個の話だほんとうと思って話す」のでなければ研究対象に数えるべきではない（「怪談の研究」1910年3月）と明言した柳田の怪異観<sup>1</sup>をめぐる、東雅夫は、虚構を退け糾弾する柳田民俗学のスタンスを解き明かしている<sup>2</sup>。

一方、1959年に『日本の幽霊』を公刊し、江戸の歌舞伎芝居より生まれた幽霊イメージの確立に光をあてた池田弥三郎は、創作怪談の研究に否定的な柳田の反応を次のように回想するのであった。

『日本の幽霊』を出して、それがわりあいに評判になった。しかし柳田先生はあんまり賛成なさらなかった。柳田先生は、フォークロアというものは都会のものではない、ようやく努力して、都会生活から離れて、田舎生活の中でフォークロアを捜さなければいけないと言っているのに、池田がまた都会に戻っちゃったというお考えがあったらしくて、（略）われわれの民俗学とは違うところを歩いているようだ、ということをお書きになった。

（「わたしの中のフォークロア」『池田弥三郎著作集』第五巻）

<sup>1</sup> 柳田國男「怪談の研究」『中学世界』1910年3月。

<sup>2</sup> 東雅夫『遠野物語と怪談の時代』角川書店、2010年。

ここにいう「都会」と「田舎」の峻別とは、幽霊の出没を「真個<sup>ほんとう</sup>の話」と信じて疑わない村里の心意伝承と、三都の芝居小屋が演出した白衣乱髪<sup>ほんとう</sup>の怨霊劇との本質的な落差に置き換えてみることも可能であろう。

現在にいたる怪談文化の研究が、フォークロアを土台とした民間伝承や都市伝説、実話怪談等の分析と、おもに国文学の側より発想される怪異芸術の表現史的研究の二様の潮流に大別される経緯は、柳田以来の研究史をひもとくならば、しごく当然の結果かもしれない。

### フォークロアと創作怪談のあいだ

もっとも、伝説や世間話のなかに散らばる「信ずるに足る怪談」の流れが、文芸虚構の世界とまったく無縁に成立したのかといえ、必ずしもそうとはいえないだろう。『日本民俗大辞典』の「怪談」の項目に見える常光徹の次の指摘は、渾然一体とした両者のありようを端的に述べている。

怪異文芸をはじめ、歌舞伎の怪談物や落語、講談などのなかには、民間に伝えられてきた怪談を背景にもつものがあり、またそうした文芸や芸能が口承の世界に影響を及ぼしてきた面も認められる。

上田秋成、鶴屋南北といった怪談作者の迫真の筆が民間の幽霊話に化学変化する。考えてみれば、文芸と民談の際限のない接近は自明の事柄かもしれない。怪談語りに心血を注ぐ表現者の虚構が、信ずるに足る怪談の源泉となったとしても、それは何ら不自然ではない。

幽霊にまつわる口頭伝承と怪談文芸のあいだに、水面下の融化現象が引き起こされたのは、それではいつ頃のことであったのか。あるいは、どのような社会背景によるものなのか。この点を探るところに本稿の第一の目的がある。

### 幽霊と仏教

一方、この世に未練を残す「浮かばれない死者」の存在を大衆に根付かせた、もうひとつの要因として、江戸幕府の宗教政策を後ろ盾とする庶民仏教の普及と土着化の動きを考えておかなければならない。

幽霊とは何か——。この問題をめぐって諏訪春雄は、

死者の世界である「他界」に住み、人間であったものが死んで後、人間の形をとって現れるもの

との定義付けを行っている<sup>3</sup>。諏訪の指摘に、幽霊を「生前の個人史」をひきずる「死霊の特殊なタイプ」とみる小松和彦の視点<sup>4</sup>を加えるなら、日本の幽霊の基本的なありようが浮かび上がるだろう。

もっとも、他界からやってくる死霊の実在が一般化する過程において、中世から近世の葬式仏教の定着を度外視できないことも事実であろう。また、それを支えた僧尼の教化活動が十分に機能し、「あの世」「亡霊」「怨魂」などの観念を民衆生活の日常に行きわたらせた点は想像にかたくない。世俗の人々が、個人の執着を因とする「浮かばれない亡霊」の発動を、自明のこととして理解するようになった土壌には、死者の鎮魂を声高に説いて歩き、民衆の死生観、冥府観を支配した説法僧たちの教線拡大の歴史が大きくかかわっていたのではないだろうか。

そのような観点に立つ時、弔祭の指南役となった僧侶用の葬送手引き書の記述や、霊魂の扱い方にまつわる近世勸化本（通俗仏書）の言説は、幽霊像の形成を探る具体的な手がかりとなるはずである。本稿の第二の目的は、日本の幽霊伝承の成り立ちを、庶民仏教の説きひろめた亡霊供養の宗教民俗とのかかわりから整理しようとするところにある。

さて、以上の二つの方向を軸に研究を進めるにあたり、ひとまず国際日本文化研究センター編の「怪異・妖怪データベース」に収録された「幽霊」の項の話例を取り上げてみたい。大正・昭和から現代に至るおよそ百年間に語られた幽霊話を材料に、一般に口頭伝説の類と見なされた話が、じつは創作文芸や僧坊関与の教化譚と近接の間柄にあることを明らかにしてみたい。それは現代怪談の意識下に刷り込まれた古い幽霊話の記憶を掘り起こす作業といってもさし支えない。

## 二 江戸怪談の影響力

### 創られた幽霊像

近現代の日本怪談に登場する「幽霊」にはある種の固定イメージがあるといつてよい。試みに手近な郷土資料をひもとくなら、民俗社会に浸透した以下のような口頭伝承を目にすることになるだろう。

- 幽霊は死んでもうかばれない時に、白装束で額に三角の紙を張った姿で墓地の柳の下に出る（『長野県史 民俗編』）
- 生前に恨みのある者か、迷いのある魂が幽霊となって出る。それらは女の姿をしており、両手を前にだらりと下げていて足がないという。（同）

<sup>3</sup> 諏訪春雄『日本の幽霊』岩波書店、1988年。

<sup>4</sup> 小松和彦編『幽霊 怪異の民俗学6』河出書房新社、2001年、「解説」など。

生前の未練、遺恨などを幽霊出現の理由としたり、白衣乱髪的女で腰から下が消えていたりするのは、今日に伝わる幽霊話の常套表現であった。

一方、こうした特色は、必ずしも古代・平安の物語、説話に遡る原初的な幽霊像とはいいたいがたい。

「幽霊」の語彙そのものは平安期の『中右記』（寛治3年〔1089〕の条）に「毎年今日<sub>一</sub>可念誦<sub>一</sub>、是為<sub>二</sub>本願幽霊成道<sub>一</sub>也」とあり、比較的早い時代の例を見出しうる。ただし、その言葉の意味付けは「死者の魂」をいうのみであって、後世のような恨みをもってこの世に現れる怨霊を意味する「幽霊」ではなかった。

また、中世の謡曲には、たしかに幽霊と化してこの世に立ち顕れるあまたの亡者が描かれている。しかし、これとても人に危害を加え災厄をもたらす怨霊の語義とは異なる表現にほかならない。田代慶一郎は、世阿弥の作品に登場する夢幻能の「幽霊」を検証したうえで、

われ頼政が幽霊と名のりもあへず失せにけり（「頼政」）

などの表現が、おしなべて観客を怖がらせるたぐいの死霊でなかった点に注目している<sup>5</sup>。世阿弥より70年ほど後の観世小次郎信光の時代になり、やっと『舟弁慶』のような「祟る幽霊」が登場すると結論付ける田代の指摘は、近世以降の怖い幽霊像を考えるための重要な手がかりとなるだろう。

歴史変遷を念頭においていうなら、死装束をまとい墓地の樹下に出て恨みごとを口走る浮かばれない「幽霊」の出現と、その明確な定型化は、江戸庶民文化の時代を待たねばならないわけである。

あるいは、幽霊のジェンダー・バランスがくずれて「女の幽霊」に傾斜しはじめのも、やはり17世紀以降の怪談文芸の流行色を度外視しては語れないだろう。京・大坂・江戸の三都を賑わせた出版文化の隆盛は、大衆娯楽としての絵入怪異小説を陸続と世に出すところとなった。同じ頃、都市の芝居小屋では、女霊の跳梁をしくんだ演目に趣向が凝らされ、夏の怨霊狂言を市井の風物誌に定着させていった。足のない幽霊の姿かたちも、煙火のなかから現れる女霊の演出と無縁ではないという<sup>6</sup>。

要するに、時系列にそっていえば、今日の幽霊像のほとんどの部分が、江戸怪談の作り出した伝奇世界を源郷とする比較的新しい文化現象なのである。

### 遺恨と復讐の構図

さらにいえば、怪談文芸の影響は、幽霊の姿かたちにとどまらず、怪談の語り口そのものに画期的な変化をもたらした。たとえば、幽霊出現の動機を死者の深い執念や、自分をあやめた相手に対する遺恨と復讐にからめて語る因縁ばなしのスタイ

<sup>5</sup> 田代慶一郎『夢幻能』朝日新聞社、1994年。

<sup>6</sup> 服部幸雄『さかさまの幽霊』ちくま学芸文庫、2005年。

ルが、民衆のあいだに自明の既視感をともなって根をおろしたのは、ひとえに江戸怪談の広範な流布に左右された結果だった。

私たちの周りに散在する幽霊話と江戸怪談の連続性をさらに可視化するため、国際日本文化研究センター編「怪異・妖怪データベース」の所収説話を手がかりに、両者の距離の近さを検証してみたい。

まずは岩手県下に伝わる『郷土研究』1933年3月号の次の事例である（データベース番号 0640476）。出典は岡田幸一「盛岡地方の民譚（二）」である。

あるところに夫婦がいた。お互いに死んでも再婚せず、死んでも葬らずに身体に漆を塗ってお堂に供えるように約束していた。そのうち、妻が死んだ。夫はしばらくして後妻をもらった。夫が旅に出たとき、前妻の幽霊が後妻の咽に喰らいついて殺してしまった。夫が帰ってみると漆を塗った前妻の口が血みどろになっていた。

前妻の妬心が後妻をおびやかす、凄惨な結末へと展開する。それは小泉八雲の「破られた約束」（『日本雑記』、1901年）と同工の怪談であるが、一方、<漆塗りの死婦>といった異形のモチーフの出所は八雲作品だけでは説明しきれない。むしろ古く遡れば、延宝5年（1677）刊の怪異小説『諸国百物語』にはじまる妬婦譚の系譜を念頭におくべきではないだろうか。同書巻二の九「豊後の国何がしの女房死骸を漆にて塗りたる事」では、臨終の床に死せる若い妻は、おのれの肉体を漆で固め手に念仏鐘を持たせて庭の持仏堂に安置して欲しいと哀願する。後妻を家に入れたことに激しくいきどおる女霊の狂乱をつづり、血生臭い祟禍へと筆を進める物語の運びようを見るかぎり、『諸国百物語』の時代にすでに漆塗りの女の怪談が定型を確立していたものと考えられるのである。

さらに、類話の拡散を怪異小説のながれに求めてみると、宝永2年（1705）刊の『御伽人形』巻五ノ七に『諸国百物語』と同じモチーフを用いた翻案が認められ、この種の妬婦譚が文芸素材の一類型となって世俗に流布した点を裏付ける。200年の時を経て、岩手県盛岡地方の口碑に流入した幽霊話のルーツは、案外、手近な江戸怪談のテキストにあるのではないだろうか。

### 亡霊と旅する男

文芸から口碑への変遷という視点から、今ひとつの事例に目を向けてみたい。第二の話は山村民俗の会編『あしなか』224号（1992年2月）所収の長野県の山岳奇談である（データベース番号 0030430）。

明治二十五、六年の暮れ、道に迷った洋装の紳士が訪ねた宿の主人は彼を泊めようとしたが、息子があまりに怖がるので出ていってもらった。まもなく紳士

は若い女を殺して逃げていたと分かった。息子は紳士の背後に血みどろで髪が乱れた若い女の姿を見たという。

逃亡した犯人の後ろに殺された女が常につきまとっている。『あしなか』の本文によれば、この奇聞は「白馬岳のふところに抱かれた蓮華温泉」での出来事だという。ほぼ同内容の話が、杉村顕道の『怪奇伝説 信州百物語』（1934年）に「蓮華温泉の怪話」と題して収録されており、昭和初期の北信地方に伝承圏をひろげていたことがわかる。顕道版では、紳士が巡査に捕らわれたあとに、子供の口から真相が明かされる様子をこと細かにつづるのであった。

「父ちゃん、怖かったね。あれ見たろ」

「何を」

「何って、あの人が座ってる時にね——

あの人の背中に、血みどろの若い女の人が<sup>とて</sup>逆も怖い顔しておんぶしていたよ」

「えっ」

主人は、総身に水をぶっかけられたように、ゾツとして思わず尻餅をついた。

「そしてね、あの人が出ていった時、その女の人フワフワ後から歩いて行ったよ。坊やの顔みてニタニタ笑うんだよ」

「小僧もうやめろ」

主人は真っ青になって子供を抱きしめた。

顕道の筆は迫真の描写力をもって蓮華温泉の怪談を再現しており、『あしなか』の素朴な聞き書きに比べると、はるかに小説虚構の色彩のみなぎる話柄に変遷しているのがわかる。

じつは、亡霊と旅する男の話の流路には、地方口碑としてのひろまりとは別に、岡本綺堂「木曾の旅人」（『近代の異妖篇』[1925年]所収）や、同じく綺堂の戯曲「影」（1936年）などの創作文芸を介した、より広汎な一般社会への拡散が想像される<sup>7</sup>。蓮華温泉の幽霊話の淵源を、信州白馬岳を訪れる登山家の噂話に求める見方もあるものの<sup>8</sup>、一方では顕道、綺堂らの文芸想像力によって、土地の山岳奇談にいつそう幻妖な話の凄味が加わり、小説、戯曲の公刊を経て全国レベルの普及がもたらされたとも考えることもできるのではないか。口承と文芸は表裏一体の関係にあると見ておきたい。

<sup>7</sup> 東雅夫編『岡本綺堂妖術伝奇集』（学研 M 文庫、2002年）解説に、「木曾の旅人」と「蓮華温泉の怪話」の比較検証が載る。

<sup>8</sup> 加門七海「解説」『異妖の怪談集 岡本綺堂伝奇小説集其ノ二』原書房、1999年。

### 「お二人様」怪談の系譜

もっとも、蓮華温泉の怪話の拡散を、近代作家の関与に限って説明するだけでは、ものごとの本質は見てこないだろう。なぜなら、この種の怪談が人々の噂になる背景に、江戸時代を通じて巷間に流伝した類型的な因縁話の系譜が見えかくれするからである。

それでは、死者の恨みを背負って旅する逃亡犯の物語が、衆庶のあいだに何の抵抗感もなく、むしろ既視感の強い怪談として受け入れられるようになった説話史の下地とはいったいどのようなものか。この点を明らかにするため、今ひとつの類話に注目してみよう。次の事例は、『民俗学』1933年11月号に載る神奈川県浦賀町の口碑である（データベース番号2260259）。

ひとりの遊女にある職人が夢中になった。職人の女房は遊女を恨んで自殺した。それから、毎夜、遊女が寝ている部屋の障子に髪の毛をサラサラあてるものがあった。男も気味悪がり、発心して札所巡りに出たが、宿で必ず「お二人様」と呼ばれた。ついに横須賀の龍本寺に入り、一生を終わったという。

宿の者に、自分は一人旅だというのが、いつも「お連れ様は？」と首をかしげられる。「お二人様」怪談ともいふべき因縁話をめぐる近代初頭の話例としては、東雅夫編『文豪怪談傑作選・特別篇百物語怪談会』（ちくま文庫、2007年）に載る明治42年版『怪談会』のなかの一話も同じ題材と考えてよい。当代随一の劇作家、演出家として知られる小山内薫は、「因果」と題して旅役者の恐怖体験を語る。恋仲になった巡業先の娘が役者の子を身ごもったまま難産死する。役者は、そうとは知らずに旅から旅の毎日を過ごしていた。あるとき、宿に立ち寄るとなぜか二人分の膳が出てくる。しばらくして嫁をもらい二人揃って料理屋に行けば、今度は三人分の座布団を出される。結局、男は横死を知らせるために娘の霊がついてきたことを悟るのであった。この種の話の近代における幅広い伝播のさまがうかがえる。

一方「お二人様」のモチーフを特徴とする怪談の流れは、17世紀の文芸作品にすでにさまざまなバージョンの類型が認められ、さらにさかのぼれば中国明代の勸善書『迪吉録』に源を発する息の長い説話の水脈が見出されるのであった。

唐の王勤政は隣家の妻と密通し、駆け落ちを約束するが、女が夫を殺したことに驚き逃亡する。旅先の宿で二人分の膳が出る。王の背に殺された夫の亡霊が寄り添って見えたからだ。殺人者はおのれの罪深さに恐れおののき、故郷に帰って刑死した。

『迪吉録』の上記の話は、日本において浅井了意の『堪忍記』（万治2年〔1659〕刊）に翻訳されたのを皮切りに、井原西鶴の『万の文反古』（元禄9年〔1696〕刊）

卷五ノ二「二膳居る旅の面影」にとりこまれ、悪女と密夫の犯罪奇譚に姿を変えていく。そこには、盲目の孫の行く末に懊悩する老婆の独白をとおして、我が娘の密通と奸夫の応報を語るといったドラマチックな小説世界が展開する。西鶴の筆の力は『迪吉録』の原話を日本の怪談としてみごとに蘇らせたのであった。

## 説話の場

ところで、文芸史に立ち現われる『迪吉録』翻案の潮流とは別の局面においても、「お二人様」怪談は民衆生活の一隅で俗耳に入りやすいものとなっていた。すなわち、日頃の寺参りや縁日の折に語られた高座説教の題材に、明らかに『迪吉録』系の説話をういた因縁が珍しくないことから、人の世の因果応報を説く仏教勸化の場もまた、説話伝播の一翼をになっていたと見てよい。説教僧の台本的役割を持つ勸化本のなかに「お二人様」の説話が散在するのは、その証拠と考えるとよい。たとえば、『合類大因縁集』（寛文6年〔1666〕刊）、『七観音三十三身靈驗鈔』（元禄8年〔1695〕刊）、『三国因縁唱導材』（寛政9年〔1797〕刊）などに、王勤政の悪報譚が出典明記のかたちで相次いで訳出され、

女ノ邪淫ニヨリテ過<sup>トガ</sup>ナキ夫ヲ殺セシ故ニ身ニ報ヒ（中略）迪吉録ニ見ユ  
（『七観音三十三身靈驗鈔』）

といった因果応報思想にもとづく解釈を与えているのが目につく。

説教僧たちの語り口は、時として原話の異国臭を完璧に払拭し、まるでその土地に起きた実話かと思まがうほどの改作をほどこしたのも少なくない。壱岐の曹洞僧であった猷山石髓は、享保11年（1726）刊の勸化本『諸仏感応見好書』のなかに「殺<sup>ス</sup>夫<sup>ヲ</sup>報<sup>ビ</sup>」と題して、長門国の赤間関に起こった事件の一部始終をしるすのであった。

昔シ長州赤間関有<sup>リ</sup>民。此<sup>ノ</sup>妻美女ナリ。傍夫語云「汝ガ殺シテ正夫ヲ他ニ去リ、成<sup>ト</sup>夫婦」。妻殺シテ正夫ヲ、欠ケ落<sup>ス</sup>山口ニ。取<sup>ル</sup>宿<sup>ヲ</sup>、屋主シ備<sup>フ</sup>膳三人分<sup>ヲ</sup>。云ク「二人ナルニ為<sup>シ</sup>何<sup>ノ</sup>出<sup>ス</sup>三膳<sup>ヲ</sup>」。云「慥ニ三人ナリト」。論<sup>ズ</sup>処ニ、自<sup>ヨリ</sup>傍夫<sup>ノ</sup>後<sup>ニ</sup>正夫出<sup>テ</sup>、向<sup>ヒ</sup>膳<sup>ニ</sup>食<sup>シ</sup>之<sup>ヲ</sup>。二人ハ怖<sup>テ</sup>不<sup>レ</sup>食セ。正夫ノ云「殺シテ吾<sup>ヲ</sup>何<sup>ノ</sup>国<sup>ニ</sup>去<sup>ヤ</sup>。中<sup>ニ</sup>帰<sup>レ</sup>国<sup>ニ</sup>可<sup>ナ</sup>リト也」。於<sup>テ</sup>此<sup>ニ</sup>消<sup>シ</sup>胆<sup>ヲ</sup>、帰<sup>リ</sup>郷<sup>ニ</sup>被<sup>レ</sup>所<sup>ニ</sup>嚴<sup>ク</sup>科<sup>ス</sup>。憎<sup>キ</sup>妻ガ心<sup>ヲ</sup>哉。縦<sup>ビ</sup>有<sup>リ</sup>トモ<sup>モ</sup>子愚妻<sup>ニ</sup>不<sup>ス</sup>可<sup>レ</sup>許<sup>シ</sup>心、古人申<sup>シ</sup>置<sup>リ</sup>。今思得<sup>タリ</sup>也。

山口の旅宿に入った男と女の前に亡霊が姿を現わし、三人分用意された膳の飯をたいらげる。「私を殺しておいて、何処へ行くつもりだね？」と問いかける亡霊の言葉に、二人はもはやこれまでと観念する。細部にわたる情景・心理描写は、『諸仏感応見好書』の物語としての完成度をよく表わしているが、一方それ以上に目を



引くのは、この話が単なる中国奇談の翻訳・紹介にとどまらず、長門国に起こった「実在の奇談」に姿を変えながら、因果の理法を語る役割を果たしたところにある。

遠い異国の物語はここに至り、じつにリアルな巷の噂話となった。聴衆の好奇心に訴えかける、世にも不思議な痴情の結末を語るようになったわけである。本来的には、仏教勸化の目的のもとに編まれ、信徒に対して口誦された勸化本の挿話が、説教僧の巧みな語りの技量を得て、土地の実録奇談に限りなく同化していったことは説話史の新たなムーヴメントと考えてよいだろう。

以上の動向を整理し、いま一度『迪吉録』の受容史に照らしていうならば、因果応報思想をベースとする邪淫と人殺しの悪報譚が民間説経僧によって諸国に拡散し、村里の寺堂で声高に語られながら、個々人の心意に幽霊と道連れの逃亡犯をめぐる因縁の物語を記憶させていったのである。怪異文芸の流行と時を同じくして、お二人様怪談の源流となる宗教説話の槐かたまりがハナシの市民権を確立していくプロセスを、われわれはそこに見出すことになるだろう。

### 三 仏教唱導と幽霊

#### 高僧伝から怪談へ

『宮城県史』21巻に載る本吉郡本吉町（現気仙沼市）の口碑に、昭和初め頃の出来事として、赤ん坊を残して死んだ若い母親がバスで自宅に帰った奇談が見える（データベース番号 C0311225-000）。

幼な子を気遣う亡き母の哀切を伝える一連の口頭伝承の背景には、僧坊を発信源とした唱導説話とのあいだのじつに近い関係性を推測することができる。本吉町の口碑の場合も母と子の深い愛情をテーマにする教化譚、たとえば浅井了意編の平仮名本『因果物語』巻一ノ十七「母の亡霊来りて子をそだて生立し事」などの因縁話の伝統を淵源とするものであった。

唱導の場との距離が最も近い産育奇談といえ、「子育て幽霊」型の口碑伝説が思い浮かぶ。東北から九州の広域に散らばる同系統の民談は、それらの発生源に産死婦の葬送に深くかかわった寺僧の役割と、彼らの持ち歩いた墓中出生譚の流伝を指摘しうるものであった。特に中世から近世の曹洞宗禅院においては、産死供養のための棺中出産呪法がしばしば執り行われた記録を残す<sup>9</sup>。

また、子育て幽霊の話は、亡母の育てた遺児がのちに歴史上の高僧となる後日談を付載する場合も少なくない。なかでも曹洞宗の通幻寂霊（1322-91）にまつわる墓中出生の秘話は有名で、東北・北陸・中国地方におよぶ広い伝承圏を持つ<sup>10</sup>。宮城県下のケースでは、新たに女幽霊の出産と子育てのモチーフを加えながら「ホヤ

<sup>9</sup> 堤邦彦『近世説話と禅僧』和泉書院、1999年。

<sup>10</sup> 同上。

ノ扇」「扇屋おつる」の名で土地の民談に溶け込み、現在に至っている<sup>11</sup>。

一方、宮城・福島の県境に位置する伊達郡の子育て幽霊譚は、「<sup>つるし</sup>四十九院」一族の始祖の異常な出生を説き明かす固有の血族伝承である点において、一般的な子育て幽霊譚とは異なる特色を見せる。

伝承の詳細は、元禄6年(1692)刊の勸化本『真言礦石集』の「陸奥国四十九院氏ガ事」により、全体像を知ることができる<sup>12</sup>。もともと奥州の地域社会を背景に成立した四十九院伝説は、近世中期の勸化本に記録されて伝承圏をひろげ、俗耳に入りやすい幽霊女房型の伝奇物語へと変容していく。さらに幕末から明治になると、奥浄瑠璃の『通幻禅師出生由来記』『正法寺開山記』に脚色され、通幻和尚の一代記に組み入れられながら芸能化の道をたどることとなる<sup>13</sup>。

#### 四十九院正雄の噂

興味深いことに、昭和期に入ると、福島県下の四十九院伝説の周辺に新たな幽霊話の再生産が見出されるようになる。郷土誌『あしなか』76号(1961年)の今野円輔「南会津探訪」には、伊具郡の四十九院家にまつわる次の伝聞がしるされている。それは大正13年(1924)に生まれた当家の息子「正雄」に関する奇しき出生秘話であった(データベース番号0030204)。

正雄君のおっかさんが死んで棺桶に入れられて埋められた。ところがその後、毎晩正雄君のおっかさんが夜中に飴屋をトントン叩いて飴を買って行くのが変だということになり、お墓を掘ってみたら、正雄という子が棺の中で生まれていた。この話は中村町小泉の慶徳寺の住職がよく知っている。

父は現存している婿に入った人で、もとは星という名字。樺太でパルプの大工場をやっている。正雄君は今年北海道大学予科に入った。彼のことは私の同級生だからよく知っているが、だまりやだ。生まれたのは、父があっちこっち歩いたので、たしか伊達郡だったという。伊達では、そういうことがあったという話は相馬郡山上村の星専有(私の祖父)が前から聞いていた。それが後から慶徳寺さんから聞き、友達の子四十九院君がその当人だったことがわかった(後略)。

もともと伊達郡の金山を本拠とした四十九院氏の墓中出生譚が、この話のベースとなっていることは間違いない。ところが、昭和の口碑では、中村町小泉(現相馬

<sup>11</sup> 花部英雄「幽霊出産譚」『昔話伝説研究』13(1987年3月);同「幽婚譚の系譜」『昔話伝説研究』14(1988年3月);堤邦彦『近世仏教説話の研究』翰林書房、1996年。

<sup>12</sup> 同上。

<sup>13</sup> 金沢規雄「宮城教育大学付属図書館蔵・仙台浄瑠璃一解題と翻刻(その三)」『宮城教育大学紀要 第1分冊 人文科学・社会科学』18(1983年)、254-270頁;同「宮城教育大学付属図書館蔵・仙台浄瑠璃一解題と翻刻(その四)」『宮城教育大学紀要 第1分冊 人文科学・社会科学』19(1984年)、354-370頁。

市小泉)の慶徳寺により、その頃北海道大学に通っていた四十九院家の「正雄」こそが幽霊一件の当事者であるとの新事実、に、伝承の中心点を移しているのがわかる。さまざまな伝聞を継ぎ合わせると、そこに四十九院正雄をめぐる墓中出生の過去が浮かびあがる。柳田の言葉を借りていえば、それはまさしく「真個の話としての怪談」であろう。

しかし、忘れてならないのは、南会津のこうした怪談の成立に、奥州に教線を伸ばした曹洞宗通幻派の深い関与を考えざるをえない点である。話者の一翼をになう慶徳寺自体が、通幻派の総本山である能登・総持寺末の曹洞宗禅林であることは、村里に語られた「真個の話としての怪談」の発信源となった曹洞宗勢力の直接的な参与を示唆するのではないだろうか。

### 寺院縁起のなかの幽霊

さて、寺院縁起の口碑化がさらに明確にうかがえるものに、『近畿民俗』121号(1990年)の記述がある(データベース番号0700391)。話者は大阪・松原市天美地区の松本甚一である。

ある日、旅の僧が三甘堂<sup>さんまい</sup>で一泊していると女のゆうれいがやってきて、「私はここにいるが大阪の両親が供養に来てくれないので頼んできてくれ」と言った。そんなことを言っても誰も信じないと僧が言うと、幽霊は着物の片袖を引きちぎって渡した。大阪の両親はあわてて供養したという。

話型からみて、古代・中世以来の片袖幽霊譚の末流に位置することは否めない。古くは『法華験記』、謡曲『善知鳥』などに立山の山岳地獄を舞台とする説話が見える。また近世の勧化本や諸地方の寺院縁起に目を移せば、立山地獄ならぬ地元密着型の片袖幽霊の救済が、全国規模の広範囲におよぶ類話を派生しているのがわかる<sup>14</sup>。

大阪市平野区の融通念仏宗・大念仏寺もそのひとつであり、寺宝「亡者の片袖」にまつわる縁起絵巻(享保9年[1724])や、略縁起「隻袖事略<sup>かたそで</sup>」の刊行によって上方の人々に知られていた。浮世草子の『新御伽婢子』(天和3年[1683]刊)、十返舎一九の『蓋笠連理袖』(文化8年[1811]刊)に縁起のフィクション化がみえ、落語『幽霊の片袖』も同心円の類話に数えてよい。

大念仏寺を起点とした広範な縁起の流布を前提とするなら、平野の南隣に位置する松原の聞き書きもまた、縁起伝承の民談化による一変奏と考えて差し支えないだろう。

同様の事例は、『民俗文化』189号(1998年)所収の長谷川銀蔵「奈良県で聞い

<sup>14</sup> 堤邦彦『江戸の怪異譚』ペリかん社、2004年。

た美濃国の妙物語」(データベース番号 2410032) のケースにもあてはまる。旅僧が美濃・今須の里で夜半、鬼に責められる老婆の幽霊の幻を目のあたりにする。生前の罪科のために苛責を受けたのだと知り、僧は寺を建てて供養したという。

データベース所収の幽霊救済のエピソードは、話の素源をたどると、岐阜県関ヶ原町今須の曹洞宗・妙応寺の縁起にもとづくものだったことがわかる。元禄5年(1692)の『妙応寺縁起』をひもとけば、当寺の開山・大徹宗令(1333-1408)は、本山総持寺の命をうけて那須野ヶ原の殺生石を鎮圧に赴く旅の途中、今須の草堂で夜更けに領主長江氏の亡母が鬼の責めに苦しむありさまを垣間見る。禅の法力により亡者の救済をはたし、長江氏の外護をうけて妙応寺の開堂に向かった歴史的経緯へと、縁起はつづくのである。寺では最近まで掛幅図の『妙応大姉縁起絵図』を用いた絵解き説法が行われていたという<sup>15</sup>。近代になってからも、悪婆救済の宗教説話が東海道を行き交う旅人や地元の住民に対して布宣され、古刹の名声とあいまってリアリティーに充ちた口碑伝承を生み出したのである。『民俗文化』に収録された幽霊伝承のルーツが曹洞禅林の布法縁起にあることは、もはや多言を要するまい。

### 幽霊の見分け方、弔い方

ところで、葬送儀礼の習俗が一般化した近世の社会において、寺坊と庶民層のあいだで死者の弔い方や、浮かばれない靈魂への対処が重要な関心事になっていたことは想像にかたくない。葬儀の手引書である「無縁本」<sup>16</sup>が17世紀から18世紀にかけて次々と編まれ出版された経緯は、幽霊の存在を信ずるに足ると考える民衆心意の形成と深くかかわる動向であった。言葉を換えると、無縁本の言説は、幽霊と共存する江戸時代人の日常と、彼らの他界観の生々しいありようを垣間見るための一級資料となるのである。「真個の話としての怪談」を生み出した信仰生活の原風景を求めて、近世の葬式指南書の世界に足を踏み入れてみたい。

庶民仏教の各宗派のなかで、殊に浄土系宗門(浄土宗、真宗)の無縁書には、僧侶の心得ておくべき葬儀の手順はもとより、横死の場合の特殊葬法や、遺族に対するケアに至るまでの弔いの現場の秘伝に言いおよぶものが少なくない。なかでも幽霊救済、産死供養の関連から特に目を引くのは、正徳3年(1713)刊の『浄土無縁引導集』である。編者は『血盆経和解』の著述もある学僧・松誉巖的で、産死婦のための流灌頂ながれかんじょうの意味、死産した胎児の扱い方、浮遊する魂、墓の妖火の原因と対策といった項目を列挙しており、江戸時代人の怪異認識を支えた仏教民俗のエッセンスをつぶさに説いている。

着目すべき内容に富む『浄土無縁引導集』より、これまで述べてきた本論文の趣旨に最も関係深いものとして、幽霊の見分け方や現世に姿を現わす理由を明らかにした巻二ノ十二「幽霊変化之沙汰」に触れておきたい。そこでは世俗の怖れる化け

<sup>15</sup> 榎本千夏「妙応寺の開創譚と絵解き」石川力山編『美濃国今須妙応寺史』同朋舎、1995年。

<sup>16</sup> 浅野久枝「無縁の名をもつ書物たち—近世葬式手引書紹介」『仏教民俗研究』7(1989年3月)。

物の正体が、「真実」「変化」「妄想」の三種に分けて説明されている。

問、世<sup>ニ</sup>有<sup>ル</sup>幽霊変化<sup>ノ</sup>者<sup>ハ</sup>如何<sup>シ</sup>。答<sup>フ</sup>、是<sup>ニ</sup>有<sup>ル</sup>三種<sup>ニ</sup>。謂<sup>ク</sup>真実、変化、妄想<sup>ト</sup>也。  
 真実<sup>ト</sup>者亡者依<sup>テ</sup>臨終<sup>ノ</sup>一念<sup>ニ</sup>、或<sup>ハ</sup>学教成迷<sup>ノ</sup>人、或<sup>ハ</sup>為<sup>ス</sup>報答<sup>ノ</sup>也。或<sup>ハ</sup>  
オットスデニツマニ  
 夫<sup>ハ</sup>已<sup>ニ</sup>婦<sup>ヲ</sup>残<sup>シ</sup>念<sup>ヲ</sup>婦<sup>亦</sup>夫<sup>ト</sup>執心<sup>シ</sup>、或<sup>ハ</sup>所住資具等<sup>ニ</sup>残<sup>ス</sup>念<sup>ヲ</sup>等<sup>ノ</sup>人也。次<sup>ニ</sup>変化<sup>ト</sup>  
ワキ  
 者、魔業、狐狸<sup>ノ</sup>業也。妄見<sup>ト</sup>者実境<sup>ハ</sup>無<sup>レ</sup>之依<sup>テ</sup>能見<sup>ノ</sup>心<sup>ニ</sup>境界、妄<sup>リ</sup>現前<sup>ス</sup>。  
 是心<sup>ノ</sup>所変也。所謂<sup>ク</sup>遍計所執也。

巖的はいう。「真実」の幽霊とは、臨終の一念が形を顕わしたものであり、夫婦のあいだの未練や財産への執着心のためにこの世にとどまってしまった死者の念である、と。これに対して「変化」とは、妖魔、狐狸のなせる変異を指し、また「妄想」とは、怖じる人の心が生み出す幻覚のようなものである、と。化け物の真偽に仏教者の解釈を与えることは、当代人の怪異観の形成に大きな影響をおよぼしたであろう。魂魄の有無と所在を論じた卷三ノ十三「魂飛之説」とともに、近世仏教の説きひろめたスピリチュアルな世界の通俗理解のあり方を今日に伝えている。

さて、そのような前近代の靈魂観の土壌のうえに幽霊の正体を見破る、次のような口碑が発想されるのではないか。『民俗学』116（1929年）の能登地方の採話を見よう（データベース番号 2260067）。

次郎兵衛が女房と娘を残して死んだ翌晩から、白衣を着た次郎兵衛の幽霊が出た。そこで人間の幽霊か獣の幽霊か見分けるために灰を撒いておいたところ、猪の足跡があり、それから来なくなった。

一見すると機知にあふれた民談のようであるが、じつはこうした発想の根元に、人畜の靈魂の見分け方を指南した唱導僧の言説が投影しているのかもしれない。幽霊とともに暮らす村里の知恵は、檀那寺の和尚の教化と無縁ならざるものであった。

### 死者の未練をたつ

話を無縁本の記述に戻す。『浄土無縁引導集』の示す三種の靈異のうち、死に臨んだ人間の執着が「成仏できない幽霊」を生むという「真実」にまつわる説明は、仏僧ならではの救済思想を基盤とする。むろん最も弔わなければならない対象は迷妄する死者の幽魂であったらう。そうした考え方が唱導の場に共通の靈魂観に支えられていることは、他の無縁本の言説からも容易にうかがえる。

たとえば、江戸小石川の源覚寺（文京区、通称こんにゃくえんま）の所蔵本である『浄土名越派伝授抄』（天保5年〔1834〕写）<sup>17</sup>では、幽霊を見たといって怯える

<sup>17</sup> 藤田定興「寺院の庶民定着と伝法」圭室文雄編『論集日本仏教史7 江戸時代』雄山閣、1986年。

信徒への対応をこと細かにしるす（「亡魂往来之大事」）。

死人がこの世に姿を現わすことなどないと、ひとまず合理的に論じて聞かせる。それでもだめな時、僧侶は在家の不安を除く便法として、経文を書いた呪符を門口に立て、戌の刻（午後八時）を選んで法名を唱え「南無阿弥陀仏」の名号を亡き者に授ける。そこまで弔ってもなお霊異が止まない場合は、別の善後策を講ずるしかない。このケースになると、執着の元凶を見定めることが重要になる。

是ノゴトク弔セテモ亡魂アラワレバ、亡者ニ必ズ執心アルベシ。其ノ執着スベキ様ノモノ、ヨクヨク尋ネ聞カスベシ。多クハ財宝、諸道具、住宅ノ処、或ハ男女ノ愛情、又ハ密々ノ隠シモノ世間ニ恥ルモノ等ナリ。

死者の心残りの対象物を探し出して、そのひとつひとつを書きしるした紙で五寸程の卒塔婆と懺悔文を巻いて死者の墓所に埋める。こうした呪法を執り行い、やっと幽霊の鎮静が完了する、との説明から、民間に流伝した「幽霊の執着」という観念の庶民信仰上の裏付けを想察しうるのではないだろうか。

次に掲げる『甲斐路』67号（1989年）の「男衆の幽霊」（データベース番号0450025）は、近世唱導者の説きひろめた幽霊遺念の社会通念が寺僧の手を離れ、民間奇談に遷移する過程を示唆するものであった。

男衆（下男）が急性肺炎か何かで亡くなった。納棺の時に年季証文を中に返さなかったので、よなよな現れて情なさそうな顔をして主人を眺めた。ある晩聞いてみると「証文を返してくれないのでいつまでもここに縛り付けられている」といったので、墓に年季証文を埋めてやるとそれきり出なかった。

モノ、人、事柄などに未練を残して成仏しない幽霊といった異聞は、現在の民談においてもしばしば耳にする。そのような幽霊出没の動機が、遡れば人間衆生の執着妄念に宗教的な救済の手をさしのべた近世寺僧の唱導の日々より生まれたものである点を、いま一度確認しておきたい。

#### 四 おわりに

以上、現在わたしたちの身近で語られる幽霊の噂話をめぐって、江戸の怪異文芸の影響や、庶民仏教の布宣した亡魂弔祭の宗教民俗とのかかわりを解析し、口碑化した現代怪談のルーツともいうべき歴史の地下水脈を遡ってみた。そうした視座は柳田國男以来の幽霊研究を、もう一度、江戸時代以前の古層に立ち戻って再考する試みとあってよいかもしれない。